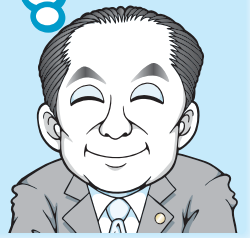


町長の一言



140年前の訪ね人

水戸市谷中にある、回天神社の役員の方が、ある日ひよっこりお見えになりました。回天神社は、水戸藩内の幕末維新で殉難された方々を祀っている神社です。

その役員の方は、明治元年9月29日に、石塚地内において戊辰戦争に敗れ、水戸城奪還に向かう諸生党の市川三左衛門勢と、それを阻止しようとして出撃してきた天狗党の藩士が戦って、石塚で戦死した子孫の方が神社を訪ねて来られて、ぜひ戦死した場所を探して欲しいと頼まれたので来庁されたという事でした。文献を見ても、石塚でそのような戦争があったという記述はあるが場所が明記されていないという事です。常北町史にも、

戦死者の名前は記載されており、その中の子孫の方が戦闘の場所を尋ねて来たので、石塚地内にそれらしき事跡が残っていないかという事でありました。

その後、水戸城弘道館の戦に敗れた市川勢は下総方面に敗走し、天狗、諸生の争いも終止しましたが、140年経た今でも、全面的な水解にはなっていないのかなとも思いました。

石塚での戦死者は、堀和善之助勝時、山中金吾幸敬、田(多)治見荒次郎国知、大曾根金之助正則、照沼莊蔵則重、となっております。わずかな手掛かりでもあればと思っっているところです。

文芸しろさと

俳句

傾いて疲れしよまの案山子なり
山崎 正行
新涼や亀は無心に水揺らし
飯田 勇一
カーテンの白く眩しく夏惜しむ
いそべきよ
花野風窸出しの色よかりけり
仲田 まちる
破。芭蕉朝日射す葉の斑なり
鯉 淵 寿美恵
秋雲と溶け合ふ煙浅間山
阿久津 あい子
酒蔵の煙突高し葉鶏頭
高橋 芦江
油絵の入賞通知豊の秋
今 瀬 多代美
良夜なり小走りに過ぐ白鼻心
森 静江
金銀の紐の揺れをり早稲実る
飯村 昭子
蟬時雨ふはりと焼ける昼のパン
飯村 愛子
日焼の子胸の名札の揺れてをり
竹内 幸子
窓開けて風入れる夜虫の声
田所 厚子
曼珠沙華色濃く旅の雨やどり
瀬谷 博子
山棟蛇草むら分けて急ぎ去る
岩下 金司
秋草の陰にひっそり道祖神
富田 多蔵
和襖の山水の絵もたれ松
田口 勝元
幾度か同じ話も暑さ故
仲田 こう

短歌

競いつつ技を褒め合ふ心得こそ
老いらの健康つくるスポーツ
杉山 みちこ
自給野菜作るを若きら受け継
ぎて土の恵みの喜びを知る
宮本 ふみ江
仏像並むところどころに飾りあ
る野草の生花が風情を添ふる
所 美恵子
三十五年生きてサボテンの花咲
けり三十センチほど白く気高く
青柳 京子
家事すみて一日終はりたりとつ
ぶりと心身ゆだね温き湯舟に
溢れくる思ひを胸に今息子ら
の結納の盃を確と受けたり
渡辺 千紗子
香り立つ夕張メロン食む舌に
とろけたる味麩る旅の地
秋山 愛子
生れし男子を抱きて母は爆死せ
り三十路の終ひに吾子等残して
大森 久子
厨に灯の点る待てるや鶯は今
朝も来て鳴く黄楊の小枝に
高堀 よしの
来る度に発育目立つ曾孫兄妹
孫娘は何時しか確かなる母
佐川 あや
友がくれし撫子の花生けくれ
ば甘き香りに心安らぐ
岩下 通子
朝な夕田めぐりするは染しけ
り実り豊けし黄金波うつ
鶴田 すが
山間の小川のしづき岩の上釣
り糸垂らす親子なごやか
阿良山 ウメノ
朝な夕愛てし深紅のさるすべ
り夜半の台風に見る影も無し
岩下 美知野

川柳

曼珠沙華白き花びら百合に似て
部屋いつばいに香り来るなり
市川 義子
眼の見えぬ友の苦難の速き日
のしたたかさわが心をえぐる
薄井 ひろ
潔しとも淋しとも見ゆ真白な
る五葉つづじの咲き満つ山は
枝 不美
揉みくれし脚にのこりぬひとま
わり大きくなりたる孫の掌の温み
片見 和枝
「リフト」に乗り露降高原の「キスゲ」
を見る八十路のわれは壮快な気分
川上 千代子
我を背に祇園祭りを見せくれ
し兄は在まきで星降る如し
島 愛子
惜しまれて切られし運命老杉
の生命を示す年輪を追ふ
多田 志保子
娘よりおくられて来し書留に
心ときめき手に頂きぬ
坪井 きよ子
富士登山成したる息子よりメー
ルあり病室で見る雲海の日の出
萩谷 登喜子
郵便を取る時宛名は三代目歴
史振り返り見る我まで
和知 美智子
優勝を決めた満塁ホームラン
鳴りやまぬ大歓声の甲子園
富田 佐智子
じわじわと迫る台風コース変え
北野 武
枝下ろし感謝する木の声がする
山本 隆 莊
秋雨は稲穂もいやと首をふる
中島 芳春